

『仙源抄』とアクセント仮名遣い

——長慶天皇はわかっていた——

坂 本 清 恵

【キーワード】『仙源抄』・アクセント仮名遣い・アクセントの体系変化

はじめに

『仙源抄』は、長慶天皇が弘和元（二三八一）年頃に著した、『源氏物語』のいろは順の語彙辞典である。日本語史研究では、大野晋¹⁾氏、馬淵和夫氏²⁾、金田一春彦氏³⁾、前田富祺氏⁴⁾、望月郁子氏⁵⁾、上野和昭氏⁶⁾、川上藜氏⁷⁾により、その跋文が示す声点および声調に対する考えや、それに基づいた定家仮名遣い批判が、研究の対象となされた。長慶天皇が定家の仮名遣いを批判したのには、天皇の生まれが一三四年で、そのころまでに起こったアクセントの体系変化、アクセント観や語調標示法の変化が関係するものとみられる。

しかし、これまで、『仙源抄』の本文中に差された声点や、その仮名遣いについての研究はなされて来なかった。本稿では、長慶天皇の跋文を正しく解釈するためにも、批判の対象となったアクセント、すなわち「お」「を」の仮名遣いを本文はどのように扱っているか、本文の差声は跋文の考えと合致するかどうかを調査・考察する。さらに『仙源抄』では、『水原抄』『原中最秘抄』『紫明抄』

といった河内本方の一族が作成した注釈書がその資料として使われたというが、『原中最秘抄』を曾祖父光行・祖父親行の作成後に増補した知行（行阿）著『仮名文字遣』における仮名遣いとの関係についても検討を行ないたい。

一 対象本と見出し項目

漢字・ひらがな・カタカナと、複数の文字種を用いる日本では、単語は文字情報とともに記憶されることがわかっている。表記形態によってイメージのしやすさが異なり、イメージしやすい語ほど記憶されやすく、「親」「男」「女」など漢字でイメージする語、「インコ」「キザ」「トビウオ」などカタカナでイメージする語、「どんぐり」「ちりとり」「ひじ」など平仮名でイメージする語などがあるという。イメージは時代によって変わるであろうが、平仮名優勢の表記形態において、単語を構成するひらがなの組み合わせである仮名遣いについても同様の現象が考えられよう。[o] [wa] の発音が合流した後、それまで区別してした文字を「お」「を」のどちらを使う語として記憶するかは、日常的に目にした書物にどう書かれていたかが、大きな影響を及ぼしたはずである。本稿で取り上げる『仙源

抄』は、その跋文で、アクセントによる定家仮名遣いを批判している。批判の対象となるアクセントによる仮名遣いを使用しないのであれば、典拠文献によるのではないかと予想される。

『仙源抄』の見出し語について、岩坪健氏は次のように述べている。⁹⁾

従来『仙源抄』の見出しは河内本によると見なされていたが、正しくは集成した三種の河内方古注釈の孫引きであり、それ故に見出しの大部分が河内本と一致するものの一部食い違うのは、親行と素寂をめぐる一門内部の対立、及び校訂による河内本・素寂本の流動に基づく。

この説明が仮名遣いにも及ぶものであるかどうか、検証する必要がある。

『仙源抄』の伝本研究は岩坪健氏に詳しく、原本である草稿本を長慶天皇皇子と耕雲とが別々に書写した結果、行悟本系と耕雲本系との二系統が生じたとされ、その異同についても言及されている。今回は、耕雲書写の京都大学附属図書館中院庫本を中心に考察を進める。この本は、耕雲が応永二(一三九五)年から正長二(二四二九)年に、原本から直接写した可能性の高い現存最古写本である。現状は虫損甚だしく、原本の閲覧は叶わなかったが、幸い「京都大学図書館所蔵貴重書画像」で確認することが可能である。行悟本系では京都女子大学附属図書館蔵『類字』(YK811R)、すなわち「専順」の奥書を持つ専順本を主に用いた。¹⁰⁾

『仙源抄』は解釈が必要な「源氏物語」の語を「いろは順」に集めた書であるが、その「いろは順」の項目には「ゐ」「お」「お」「ゑ」がない。語頭の「ゐ」の例はないが、「お」は「を」に、「ゑ」は「え」

に掲出されている。発音上の区別のない「い(ゐ)」「を・お」「え・ゑ」をまとめているのである。なぜこのような見出しの掲出をなしたのであるうか。『仙源抄』の跋文には、

同文字なる詞をいろは次第にあつめと、のへてみれば六十余卷只一帖につ、まり文字のついでをたつねぬればたな心をさすかことし

とある。『紫明抄』が巻ごとに語釈を行うため、同じ語を何度も掲出して注釈するのに比すと、合理的なまとめ方である。「いろは順」にした上に、発音が同じ文字として「い(ゐ)」「を・お」「え・ゑ」を扱い、最初の掲出にまとめたのである。この方針は、掲出語語順「をひらく」「をい(これはまして)」「をい(さき)をみれば語中の発音にも及んでおり、「をひ」を「をい」の位置にまとめている。

また、青木愉子氏によると、見出し語は語頭以降、第四音節、第五音節までを対象として「いろは順」であるというが、この方針を「を」の部で見ると、前半は「をほとか」「おほとこのもる」「をよそ」の順や、「をよすけもておはする」「をたき」「おれてとしふる人」「をれ物」のように語頭の「お」「を」を書き分けても、以下のいろは順の配列は変えていない。それは「をすかるへき」まで続くが、そのあとに「おはさうす」「おほえとの」「おりから」「おと、「おまし所」「おさく」「おさめみかはやうなとまで」「おきなこと」「おもと」と語頭「お」の項目が続く。「おりから」と「おと」とは逆になっているが、「を」で始まる一群に対して後半に「お」で始まる一群が別に掲載されている。不統一な掲載順である。耕雲本系のうち宮内庁書陵部本(谷344)では、前半に現れる「お」をすべて「を」に改めて立項している。

二系統における「お」「を」の異同は、耕雲本系の「おはさうす」を行悟本系が「をはさうす」としている点、行悟本系には「おろしたてんや」がない点である。耕雲自筆本では「おろしたてんや」は見出し「を」の下に書きこまれたものであるが、耕雲自筆本とその模写本以外の耕雲本系の多くは「をろしたてんや」に改めた上で、第一番に見出し立項している。また、耕雲本系では「おはさうす」が「おはえとの」の直前であるが、行悟本系では、「をはおと」、「をはさうす」「をに」の位置に来ている。

さらに、跋文では定家の仮名遣いの問題点を論じ、次のように「四声にかなはず」としながらも、「にはかにこのついでをあらたむへきにあらず」とする。

和字に文字つかひのかねてきためをきたきことを定家かきたる物にも緒之音を 尾之音お などさためたれば音につきてきたすへきかときこえたり しかれともそのさためたる所四声にかなはず 又一字に義なければ其文字其訓にかなふへしといひかたし 音にもあらず義にもあらず いつれの篇につきてさためたるにかおほつかなし しかれともにはかにこのついでをあらたむへきにあらず 又ひとへにこれを信せは音義にかなふへからざるによりてこの一帖には文字つかひをさたせず かつは先達の所為をさみするにたりといへとも音に通せむ物はをのつからこの心をわきまへしれとなり

これを見るに、四声による定家仮名遣いについて批判はしたものの、この抄を書くにあたっては、これまでの習慣を改めないことを宣言していると考えられる。さらに「この一帖には文字つかひをさたせず」としながらも、「音に通せむ物はをのつからこの心をわき

まへしれとなり」とあるところをみれば、『仙源抄』の編纂にあたって、その本文では声（アクセント）による仮名遣いを採用していると解釈することができる。このことを確認すべく、「を」に掲載された語の仮名遣いについて検討を行なう。対象とするのは「を」で始まる四九語、「お」で始まる一二語で、「を」で始まる単語が圧倒的に多い。単語列記の辞書の場合は、「を」で始まる単語が多く収められているだけでも、体系変化後のアクセントによっている可能性が高い。以下、合計六一語のうち、意味不明の「をいこれはまして」を除いた六十語について、仮名遣いとアクセントについて考察する。

二 「お」「を」表記とアクセント

二一 「を」表記の語とアクセント

耕雲自筆本掲載の仮名遣いにより、アクセントとの関係をみる。用例の上には『源氏物語古注集成21 仙源抄』（一九九八、おうふう）の見出しに付された番号を示す。アクセントについては、秋永一枝他編『日本語アクセント史総合資料 索引篇』（一九九七、東京堂出版）の表記と出典略称を用いる。これに掲載のないアクセント変化後の資料である中院通茂『源氏清濁』『古今聞書』は、坂本清恵編『近世上方アクセント資料索引』（一九九四、アクセント史資料研究会）による。また、『仮名文字遣』については坂本清恵編『定家仮名遣関係索引』（二〇〇八、アクセント史資料研究会）による。

「アクセント体系変化の前後で高起式であることが変わらない語」

1 「をとめ」は「をろす」に巻名注記をした例であるが、『名義

巫私』LHH、『神紀』人紀。巫私』LHH、『神紀』古今』HHHで、体系変化に関係なく、鎌倉時代から語源から離れたHHHがあったと推定されている。

6 「をはおと、」は「祖母也」とあり、「をは」は「和名』にLFもあるが、HHも。『古今』浄拾』にHLとあり、高起式であったらう。

8 「をほ、れみたり」は「溺也」とあり、「おほほる」は「金光名義』巫私』古今』四座』にHHHLがある。また体系変化後の例としては、『源氏清濁』に「おほ、れ(上上上濁平)」、『古今聞書』に「おほ、れん」HHHHがある。

24 「をち」25 「をちかた」は、それぞれ「遠也」「遠方也彼方」とあり、「をちかた」は「人紀』漢籍』にHHHHの例があり、単独も古くは高起式であったと考えられる。

28 「を、しく」「男々也雄抜日本紀』は「人紀』に「ををし」HHFの例がある。

33 「をれ物」は「おろかなる物といふなり」とあり、「おろか」名義』字鏡』補忘』平節』大観』近松』HHHLと同語源で、高起式であったと考えられる。

38 「をのかし、」は「をの」が「人紀』袖中』近松』にHHで、高起式で問題がない。

48 「をしとのたまへる」『進食日本紀』は動詞「をす(食)」「神紀』人紀』乾私』HLからの転成名詞で、HHが推定される。

50 「をしつ、み給へる」は第一類動詞「押す」であり、HLである。

4 「をいすかひぬれ」は「をい、つる心也愚案をいつ、きたる心

歎」とあるので、仮名遣いから考ええると低起式を保つ「生い」や「負い」ではない。第一類の「追い」であろう。

「アクセント体系変化により高起式になったと思われる語」

1 「をひらく」は「老ゆ」が第二類動詞であり『古今伏片』に(平上上平)の例があるが、体系変化後の例としては『古今聞書』にHLHLの例があり、高起式に変化する語である。

3 「をいさき」は第二類動詞相当「生ふ」と二拍第一類名詞「さき」との複合語であり、LLLLが推定され、体系変化後にはHHHLの高起式アクセントになったと考えられる。『仮名文字遣』諸本では「おいさき」で立項されている。

5 「をろす」は第二類動詞で、体系変化後にHLHLである。

7 「をに、41 「をやなし」、42 「をやそひてくたり給」、47 「をきの枝つとにして」は、それぞれ第三類名詞「鬼」「親」「荻」が体系変化後にHLとなる。『仮名文字遣』では古態の本は「をに」「をや」であるが、「おき」のみ諸本が「おきの葉」を挙げる。

接頭語「おほ(大)」を持つものは体系変化前は低起式であり、LLLL・LLHH・LLLLH・LLLLHLなどは体系変化後に高起式に変化するが、LHHHについては低起式を守る。『仮名文字遣』ではほとんど「おほ」の仮名遣いがとられる。

11 「をほち」は「大路方御路日本紀」とある。「をほち」は体系変化後のアクセントを反映した仮名遣いと考えることができよう。『仮名文字遣』は諸本によって注の漢字表記が異なるが、いずれの場合も「おほち」の仮名遣いでゆれがない。

12 「をほよそ」は「大都也 又凡也」とある。『名義』にLHLHL、

45 「をさめとの 納殿」は第二類動詞の連用形「納め」+第三類「との」との複合語で、L L L L LからH H H H Lへの変化が推定される。

46 「をきなか川」は「興中川又息長川」で、『仮名文字遣』にも「をきなか河」の例があり、高起式に変化したものと考えられる。

49 「をしかいもとあるし」には「紫明云凡垣下主也又云を文字を上につけてしか面いもと夫婦あるし主とよむへしなどいふ説あり愚案後説難信之又定本におほしきいもと、かけりそには延元宸筆にて凡垣下響とつけさせたまへり」とある。『仮名文字遣』諸本も「をしかいもとあるし」を「凡垣下主 源氏二在之」として掲げており、『紫明抄』の説を見出しとして掲げ、「凡」の体系変化後の高起式アクセントによる仮名遣いにしたと思われる。

51 「をもた、しく」は「面立也」とあり、「面」は『袖中』にL L L「古今」にL Hあるが、「面」を前部成素にもつ「おもしろし」が『名義 人紀』L L L L FからH H H L Lと変化するのと同様、体系変化を経て高起式になったであろう。

なお、アクセント体系変化前のアクセントが不明な例などは次の三例である。

31 「をたき」(愛宕)については、現代京都がH L LとH H Hであるところから、少なくとも体系変化後は高起式アクセントであったと思われる。

39 「をくたかき 臈高也」は、『平節』にH Lの例があり、体系変化後は高起式アクセントである。

52 「をすかるへき」には「をそき心也又云をつく心也紫明にはをいすかるへきとかきておいつく心なりと注たり愚案此注心えかた

し定本にはたすかるへきとあり」とある。大島本は「たすかるへき」、河内本は「おすかるへき」、保坂本は「をすかるへき」である。「遅き心」とすれば、第一類形容詞でH H L、「追いつく」と考えれば、「追う」が第一類動詞でH Hとなり、「たすかる」であつても体系変化後は『平節』にH H L L例がある。

9 「をほとか」、44 「をこめいたる」はアクセントの確例がない。推定できないものもあるが、アクセント体系変化を受ける語については、ほぼ体系変化後の高起式を反映したと思われる「を」での表記が行われている。

二―二 「お」表記の語とアクセント

10 「おほとこのこもる」には〈平上上上上濁上上〉の声点があり、低起式アクセントを反映している。『源氏清濁』に「おほとのおふら〈去上○○○○〉」があり、低起式が保たれたものと思われる。

32 「おれて〈去上上濁〉としふる人」は「折れで」で第二類動詞でL Hのアクセントを反映したものである。

53 「おはさうす」は「おはしますなり」としており、「おはす」が『名義 人紀』にL H Lであり、アクセント体系変化の影響は受けない。行悟本系が「をはさうす」とするのは、書写者による改変か。山脇毅氏は『紫明抄』「おはさうす おはします也」とあることと、河内本系統の平瀬家本の用例も大体「おはさうす」であることから、『仙源抄』の原本も「おはさうす」ではなかったかと推定している¹³。しかし、章末の表のように「仙源抄」と「尾張河内本」の「お」「を」との一致率はわずか30%である。また、別途詳しい研究を行う予定であるが、『紫明抄』では圧倒的に「お」ではじま

るものが多く、『仙源抄』とは異なる規範によったと考えられる。

54 「おほえとの」には「大江殿也」とあるが、アクセントの確例はない。「おほ」は低起式であり、LHLのアクセントであったか。体系変化後の例としては、『古今聞書』に「おほえ」LHLの低起式例がある。

55 「おりから」は「おり」が『名義 古今 謡曲 平節 近松』LHであり、これもアクセント体系変化を受けなかったか。

56 「おと、」は「殿也又大臣をもいふことによるへし」と注され、体系変化後の『名目』にLHH、『平家』にLHLがあり、低起式を保っている。『仮名文字遣』では「おと、殿」と「おと、大臣臣日本記」が別に立項される。

57 「おまし所」には「寢殿也オサマシ史記 寢同 愚案御座所といふ也」とあり、「お」が低起式で「ます(座す)」『巫私 顕後 顕拾』LHの例があり、LHHHLHが推定される。

58 「おさく」は「幹也オサク治優同」とあるが、「長」は『名義 袖中』LHであり、『源氏清濁』には「去上平」がありLHLのアクセントが推定される。『仮名文字遣』では「おさくし」を諸本が立項している。

59 「おさめみかはやうなとまで」には「長女御則人」とある。「長女」は『和名』にLHLあるが、「長」がLHであり、LHHで始まるアクセントであったか。『仮名文字遣』諸本でも「おさめ」である。

60 「おきなこと」は「翁言也」とあり、「翁」は『名義 神紀 巫私 丙私 謡曲 玉淵』にLHHがあり、前部成素の低起式を保ったと考えられる。

61 「おもと」「侍者也」は「御許」が語源であり、「許」は第四類なので、「御」の低起式が保たれてLHHのアクセントをもったと考えられるか。『仮名文字遣』では古態を示す本では、「御」の語源意識を失った「をもと人」が立項される。

62 「おろしたてんや」は項目「を」のすぐ下に書き込まれたものであり、「おろし」の右に「下」の書き込みもある。「おろす」は第二類動詞で体系変化を経て、低起式から高起式に変わる語である。唯一これが『仙源抄』の例外となる。しかし、先に述べたとおり、行悟本系にはこの例がないところから、耕雲の書き入れと考えることができる。さらに、他の耕雲本系では「をろしたてんや」に直されて採録されているので、清書本があるとすれば、「をろしたてんや」になったであろう。

二―三 考察

以上のように、『仙源抄』における「を」と「お」の所屬語は、体系変化後のアクセントによって書き分けられている。跋文に「しかれともにはかにこのついでをあらたむへきにあらす」と述べているとおり、『仙源抄』では、アクセントによる仮名遣いに疑問を持ちながらも、とりあえずは長慶天皇が自身のアクセントによって個々の単語の表記を決めたのである。これは、行阿の『仮名文字遣』の項目選定において、馴染みの高い語は体系変化前のアクセント仮名遣いというおそらく行阿が目にしていた書籍類の仮名遣いを用い、馴染みの低い語は体系変化後の自身のアクセントによっていると思われれることは、規範が大きく異なっている⁽⁴⁾。

『仙源抄』の仮名遣いがアクセント体系変化後のアクセントに

	ア (変化前)	ア (変化後)	歴史的	『仙源抄』	『仮名文字遣』
『仙源抄』	23(54)	54(55)	21(60)		20(37)
	42.6%	98.2%	35.0%		54.1%
大島本	48(56)	23(58)	40(58)	25(58)	26(37)
	85.7%	39.7%	69.0%	43.1%	70.3%
陽明文庫本	32(56)	26(56)	36(59)	17(59)	23(37)
	57.1%	46.4%	61.0%	45.8%	62.2%
保坂本	38(53)	20(56)	36(56)	23(56)	25(35)
	71.7%	35.7%	64.3%	41.1%	71.4%
尾張河内本	46(60)	16(60)	45(60)	18(60)	28(37)
	76.7%	26.7%	75.0%	30.0%	75.7%

よって個々に定められたものであることを裏付けるために、アクセント体系変化前(ア変化前)のアクセントによる一致率、アクセント体系変化後(ア変化後)のアクセントによる一致率、歴史的仮名遣いとの一致率、『仮名文字遣』との一致率を示す。また、おおよその目安として『源氏物語』の「大島本」「陽明文庫本」「保坂本」「尾張河内本」との一致率をみる。各本にゆれがある場合にはとりあえず一致しているとした。¹⁵⁾ 漢字表記や用例のない場合は集計から外した。上段は用例数で、(一)内は出現の全体数である。六十語のうちアクセント仮名遣いとの一致率をみる場合には、アクセントが推定できないものなどは除いた。

『仙源抄』は個別に検討したとおり、アクセント体系変化後のアクセントによってお

り、一個の例外は、先に述べた耕雲による書き入れとみられる「おろしたてんや」である。『仙源抄』と『源氏物語』諸本との一致率はすべて50%以下であり、そこに典拠関係をみることはできない。『源氏物語』本文の視覚的な馴染みとの関係によって仮名遣いが使われたとは考えにくい。特に河内本系とはもともとかけ離れた仮名遣いとなっていることがわかる。いずれ『紫明抄』『原中最秘抄』諸本の研究をしたうえで、それらが『仙源抄』の仮名遣いの典拠となったかどうかを確認するが、「お」「を」の仮名遣いに関しては典拠関係にはないことが予想される。

青表紙本系の「大島本」はアクセント変化前のアクセントに対して85%の一致率である。河内本はアクセント体系変化前のアクセントによる場合、歴史的仮名遣いとの合致率、『仮名文字遣』との一致率がすべて75%程度である。

『仙源抄』と『仮名文字遣』との一致率は54.1%である。『源氏物語』そのものよりは合致する割合は高いが、『仙源抄』が直接この仮名遣いを踏襲したと言えるものではない。アクセント体系変化後の長慶天皇自身のアクセントによって「お」「を」を書き分けたとして間違いはない。

三 『仙源抄』の声点

長慶天皇が『仙源抄』の「お」と「を」を、南北朝期に起きたとされるアクセント体系変化後のアクセントによって書き分けていたことが明らかになったが、アクセントを表す声点についてはどのようなものを使っていたのかを確認する。声点については、長慶天皇自身のアクセントで差声したのか、他資料から移したのかを検討し

なければならぬ。

三一 本文中の声点について

『仙源抄』本文の声点をみると、清濁を明らかにするためのものと、語アクセントを明確にするためのものがある。しかし、清濁を区別するとみられる一文字だけへの差声が平声位置と、上声位置、去声位置に書き分けられており、清濁を明らかにした場合においても、その部分の声調をも示しているらしい。また、声点の量は本によって異なるが、耕雲本がもっとも多くなっており、耕雲による差声も混じっているのではないかと疑いがある。耕雲は『仙源抄』に『河海抄』からの追加をなしているというが、声点なども転写している可能性があるかもしれない。本稿では、耕雲自筆本と専順本との両者に差声のある例のみを取り上げ、一方にのみ声点のある例と清濁注記の詳細は、別稿で考察を行う。

まず、長慶天皇自身の差声ではないものに、次の二例がある。4「わかむとほり（平声平濁平平）」は「教隆説」として挙げられたもので、説とともに移したものである。清原教隆（一一九九～一二六五）の声点であれば、体系変化前のLLLLLであらう。専順本は（平声平平平平）と連濁しない形を注記する。10「むくつけし（平声平濁平〇）」は「蠢也又貪也 愚案此注猶心ゆかずや」としており、注記とともに声点にも典拠があったと推察される。

また、（平声…）ではじまる語には30「をよすけもておはする（平声上上上上平上上〇）」、専順本（平声上上上上上上上上上上〇）、17「つしやき（平声上上平濁）」の例がある。前者30は、声点のみで注釈をもたない。「を」表記に平声点が差されているところを見ると、長

慶天皇自身のアクセントではなく、移声したものではないだろうか。『名義』に「およす（著）」L LHの例があるが、「おはする」L LHで分かれるので、声点で「およすけもて」と「おはする」とに分けられそうである。天理本『河海抄』には（平声平平平濁平上上〇〇〇〇）おとなひたる也」と『仙源抄』とは清濁の異なる「およすげ」「もておはする」に分かれる声点がみられる。後者「つしやき（平声上上平濁）」は、「実法心也」と注されているが、河内本にのみ見える語で、大島本には「つ、やかに」、陽明本、保坂本には「つ、やき」とある。アクセントは不明であるが、体系変化前の第二類動詞を示すような声点が差されている。これも移声の可能性があるか。

（平上…）で始まる語には10「おほとこのこもる（平上上上上濁上上）」がある。接頭「大」の単語の中で唯一「おほ」の仮名遣いで示された例である。『源氏清濁』に「おほとこのあふら」にLHで始まる例があり、低起式のアクセントを反映した声点である。

（去上）を含む例は、32「おれて（去上上濁）」としふる人、10「よき（去上）みち」、34「をそき（上去濁上）人」がある。「おれて（上去上濁）」は「折れ」+打ち消しの助詞「で」のついたものである。古くは、助詞が低くつくLH Lであるが、LH Hになっていたか。

「よきみち」は「能路なり よき（去上）みちとよむへし又説よき（上去濁）みちといふなり過路也」とする。第二類形容詞「よし（良）」の連体形LHを反映した（去上）の声点と、濁音を含む（上去濁）は第一類動詞「よぐ（過）」からとすれば、「よきみち」はH LH Hである。「をそき（上去濁上）」は語中に（去）が来る例である。専順本は（〇去濁上）である。形容詞「をぞし」は「おずし」

に『古語』L L Fの例があり、体系変化を経てH L Lとなると推定されるが、〈上去濁上〉はその中間に現れるH L Hを反映するのではないか。

〔上上上〕の例は24「かたみ〈上上上〉記念」がある。『名義 古今 顕拾 浄拾 四座 謡曲 平節 近松』にH H Hがある。耕雲本の「た」の声点はやや下であるが、H H Hを反映するとみてよい。また、耕雲自筆本のみ次項25の同音語に「かたみ〈去上上〉相互也」の声点が差されている。相互の意味の「かたみ」にはアクセント例がないが、「たがひ」『名義 字鏡 巫私 古今 四座 謡曲 平節 近松』L H Hのアクセントと同様であったか。

「と、めし」〈上上濁上上〉については、「人の心まけたる事は… 停也或説不可留悪事於後代也しからはと、めし〈上濁〉とよむへし」と清濁二説をあげ、「愚案にこりてよむもまことに一義也しかれとも定本には人の心まけたる事はあらしとあり定家卿説におきては無異論歟」としている。『留む』は第一類動詞で声点に合致する。

「をこり」については、耕雲自筆本の項目見出しには声点がなく、注釈部分に「かゝる事の… 驕也 又起といふ説あり しからはをこり〈上上平〉とよむへし愚案下説宜歟」「起こり」の声点として〈上上平〉を差している。「起こり」は第二類動詞からの転成名詞で、アクセント体系変化によりL L LからH H Lに変わる。この変わったH H Lを注記し採用している。専順本は項目見出しにも「をこり〈上上上〉」という声点が差されている。「驕り」は第一類動詞からの転成名詞であり、H H Hのアクセントであるから、おそらく見出し項目の声点はこの反映なのであろう。これをみると、見出し語の設定には典拠があり、そこには声点があったと考えられる。

「かこと〈上上濁〇〉誓言也」とある。『袖中抄』にH H Hがある。「うけはり〈上上上平〉受張也諸也請也」とある。注のとおりであれば、第二類動詞「うけ」+第一類動詞「はり」の語構成でL H Hとなりそうである。耕雲本系京大本には「うけはり〈上上上濁〇〉」で濁音に写されている。

以上、耕雲自筆本と専順本との両者に声点が差された例を検討したが、見出し項目の声点は長慶天皇が自身のアクセントで差したのではなく、典拠が存し注釈とともに移声したと考えられる場合が多い。L Hを示す声点に〈平上〉と〈去上〉とがあることから、複数の典拠からそれぞれ移声したか、L Hという上昇調に〈去上〉を差すのが長慶天皇の差声方法であったからか、のどちらかであろう。

長慶天皇が何を典拠としたのかについては今後の課題とし、河内方古注釈諸本における仮名遣いと声点の研究を行うことにより、それを解明していきたい。

三―二 跋文の解釈

三―一で検討したとおり、本文に差された声点は、典拠があつて写されたものもみられ、長慶天皇自身の差声によるかどうかは、確定することができない。ここでは、これまでも研究がなされてきた跋文における記述と声点とを検討してみる。

跋文は、「中比定家卿さためたるとかいひて かの家の説をうくるともからもちる様あり」と述べ、アクセント仮名遣いをどう解釈していたかがうかがわれる。

しはらくつねによむやうにて声をさくらはお文字は去声なるへし 定家かお文字 つかふへき事をかくに山のおくとかけり

まことに去声とおほゆるをおく山とうちかへしていへは去声にはよまれず上声に転ずる也 おしむ おもひ おほかた おきの葉 おとろくなどかけり これはみな去声にあらず この内おしむは おしからぬといふを去声になる おもひも おもひくといふをりははじめのおもむしは去声のち去声にはよまれぬなり

とあり、「お」で示される例として「山のおく」を挙げる。「おく(奥)」はLHを反映したものであろうが、「おくやま」とすると「去声にはよまれず上声に転ずる」という。「奥山」は体系変化後の「正通 玉淵 脚結」にHLLLがあり、これに転じたというのである。去声ではない「お」の例として挙げられた「おしむ(惜)」「おもひ(思)」「おほかた(大方)」「おき(萩)の葉」「おとろく」は定家の仮名遣いで示された例であり、『下官集』掲載語である。これらすべて、アクセント体系変化を経て高起式に変わってしまったので、去声で示されないとするのである。「おしむはおしからぬといふを去声になる」については、「おしむ(惜)」は第二類動詞で、LHからHLLに変化するが、「おしからぬ」は第二類形容詞「惜し」のかり活用でLHLLLのアクセントであり、この「お」を去声としてとらえたのである。また、「思ひ」もLHLからHHLに変わり、第二類動詞の反復形の「思ひ思ひ」は副詞的な用例では、現代京都はLHLLLLである。『古今聞書』に同じ第二類動詞からの「かへすかへす」に《DUU×××》の胡麻章例があるところから類推して、体系変化後に高起式にならずLHLLLLのアクセントであったか。

アクセント体系変化ではLHで始まるものがなくなり高起式にな

るから、語頭の低は一旦LHという上昇のみになる。本文中における平声との相違をどう考えていたのかをさらに検討していく必要があるが、去声は単なる低ではなくLHのように次拍を含めた上昇を表すものと考えておく。本文の「お」「を」の書き分けと、この記述を合わせて考えれば、長慶天皇はアクセント体系変化後のアクセントを習得していたと考えて問題はない。

しかし、これに続く跋文では、変化後には合流してしまう第三類の「かみ(平平)神也」と第二類の「かみ(上去)紙也」に異なる声点が差されており、これまで「神」はLH、「紙」はHLを示すと解釈されている。金田一氏はこれを「すでになくなった音の区別を、知識と知っていた」とするが、第四類の「かみ(去上)上也」の差声も含め、同じ文字でもアクセントが異なることを示すためにわざわざとられた差声にすぎないのではないか。長慶天皇の目にした資料のなかには「わかむとほり(平平平平濁平平)」のように平声点が続くものもあり、「かみ(平平)」を長慶天皇自身のアクセントの反映であると考えないほうがよさそうである。

四 まとめ

定家仮名遣い批判の書とされてきた『仙源抄』であるが、その本文の立項において、「お」「を」については、長慶天皇自身が習得した、アクセント体系変化後のアクセントにより書き分けられていることが判明した。天皇は、定家の仮名遣いとは異なることを理解しながらも、アクセントという基準軸は変えることなく、「お」と「を」の書き分けを実践していたのである。

また、本文に施された声点には、移声によるものもあり、跋文に

おける声点についても、天皇が自らのアクセントで表したのではなく、典拠文献によった可能性も考えられる。

個々の語の仮名遣いを、自身のアクセントによって決定した資料として『仙源抄』を位置づけることができたが、声点の典拠には、どのような文献を参考にしたのかを明らかにしていく必要がある。また、行阿『仮名文字遣』は、定家仮名遣いの辞書的性格を持つものと位置づけられてきたが、その序文には、アクセントにより仮名遣いを定めたとは記されておらず、本文の見出し立項についても、アクセント仮名遣いに拠る部分と、定家の仮名遣いを典拠として用いたのではないかと思われるものが混在する。長慶天皇が『仙源抄』執筆にあたり、『仮名文字遣』を典拠としていないことも含め、体系変化後のアクセントによる仮名遣いがどのように処遇されたのかを、『源氏物語』古注釈書における仮名遣いと声点を探ることとで解明していきたい。

- 注(1) 大野晋「仮名遣いの起原について」『国語と国文学』二七―二八(一九〇・二二)〔『仮名遣いと上代語』岩波書店 一九八二・二に所収〕
- (2) 金田一春彦「国語のアクセントの時代的変遷」『国語と国文学』三五―一〇(一九六〇・一〇)〔『金田一春彦著作集』第九巻 玉川大学出版部 二〇〇五・九に所収〕
- (3) 馬淵和夫「定家かなづかいと契沖かなづかい」『続日本文法講座2表 記編』(明治書院 一九五六・六)
- (4) 前田富祺「近世における国語アクセント観」『国語学』七一(一九六七・一一)
- (5) 望月郁子「『仙源抄』跋文の語調標示の方法とその発想―去声の体言と

その派生語における―』『常葉女子短期大学紀要』五(一九七四・三)六

〔『類聚名義抄の文献学的研究』笠間書院 一九九二・二に所収〕

- (6) 上野和昭「四声観と定家仮名遣批判」『新編荷田春満全集月報』一一(二〇〇九・六)

- (7) 川上肇「契沖のアクセント表記法」『日本近代語研究』五(二〇〇九・一〇)

- (8) 杉島一郎・賀集寛「表記形態が単語のイメージの鮮明性に及ぼす影響」『人文論究』四六(一九九七・二)

- (9) 岩坪健「『仙源抄』所引の本文系統―河内本の異同―」『中古文学』四一(一九八八・五)

- (10) 岩坪健「『仙源抄』の系統」『親和国文』二九(一九九四・二二)〔『源氏物語古注集成2-1 仙源抄』おうふう 一九九八・二〕

- (11) 他に調査を行ったのは以下の本である。
耕雲本系

b 京都大学附属図書館蔵『仙原抄』(4-30セ5)

c 宮内庁書陵部蔵『仙源鈔』(457-194) 誤写あり。

d 宮内庁書陵部蔵『仙源鈔』(谷344) 複製の(複3080)を閲覧。

f 内閣文庫蔵『仙源抄』(特62. 13) 国文学研究資料館マイクロ資料による。

j 神宮文庫『仙源鈔』全(1644)「をほそう」に「をうそうイ」「同しかさし」「同しこと」が漢字表記される。国文学研究資料館マイクロ資料による。

m 金沢市立図書館蔵『仙源鈔』(0968-115) 声点なし。国文学研究資料館マイクロ資料による。

p 国文学研究資料館初雁文庫蔵『源氏仙源抄』(E1316) 耕雲自筆本との相違九例。

s 川瀬一馬蔵『仙源抄』古辞書叢刊刊行会 雄松堂(一九七七)複製。

行悟本系

一九九九・一〇による。

A 金沢市立図書館(稼堂文庫)(0918-410) 国文学研究資料館マイク
ロ資料による。「をほち」を「おうち」とする。声点なし。国文学
研究資料館マイクロ資料による。

C 宮内庁書陵部蔵『仙源抄』(154-16)

G 京都大学附属図書館蔵『源語類集』(4-30ケ15)「おろしたて
んや」「をほよそ」「をほそう」「をほきみすかた」が抜けている。

H 彰考館『南朝長慶院源氏御註』(巳2-07746)「右原本塙校
蔵本享和元年夏写」声点と濁点が混ざった様子。国文学研究資料館
マイクロ資料による。

N 彰考館『源氏物語抄 全』(口2-07745)「おほとこのもる(上上上
上上濁上濁上)モノ声本ノマ、」の注がある。綴に錯綜あり。国文
学研究資料館マイクロ資料による。「を」の項目は耕雲本系。

宮内庁書陵部蔵『仙源鈔』(351-688)これは「を」を「お」
にしているものが二例ある。

彰考館蔵『仙源鈔 一名類字源語 全』(口2-07744)「をほとこのも
る(上上上上濁上濁上)イモノ声本ノマ、(朱)」「おかしき」が自
筆本と異なる。国文学研究資料館マイクロ資料による。奥書は行悟本
系であるが、「を」の項目は耕雲本系である。

東京教育大学附属図書館蔵『仙源抄 全』(ル120-190)。国文学研究
資料館マイクロ資料による。

(12) 青木怜子「仙源抄」『国語学研究事典』(明治書院一九七七)

(13) 山脇毅『源氏物語の文献学的研究』(創元社一九四四・一〇)

(14) 坂本清恵「ゆれる(をのこ)とゆれない(おとこ)——『仮名文字遣』

諸本とアクセントの体系変化——『古典語研究の焦点』(武蔵野書院

二〇〇九・一一)(予定)

(15) 伊井春樹編『源氏物語 CD・ROM角川古典大観』(角川書店